

Title	規模・形状の小ささを表す外来語由来の造語成分に関する研究
Sub Title	
Author	栗原, 光司
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2025
Jtitle	日本語と日本語教育 No.53 (2025. 3) ,p.76- 76
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大学院文学研究科日本語教育学分野修士論文要旨
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20250300-0076

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〔大学院文学研究科修士論文〕

規模・形状の小ささを表す外来語由来の造語成分に関する研究

栗原光司

日本語には、規模・形状の小ささを表す外来語由来の造語成分がいくつも存在し、互いに意味上棲み分けを行いながら、日本語の造語に関わっている。本稿では、その中でも「ミニ」、「プチ」、「リトル」、「マイクロ」の4つを取り上げ、後接要素の語種、意味分野、及び各造語成分を含む合成語の用例からそれぞれどのような意味用法を有するのかを明らかにすることを目的とし、調査を行った。資料は主にBCCWJを用いたが、筑波ウェブコーパスやGoggle検索で補完した。その結果は以下のようになった。

「ミニ」は、『分類語彙表（増補改訂版）』の「生産物」部門の下位分類にあたる中項目のうち「道具」や「食料」にあたる要素と結合しやすい。また、林慧君（2015）で指摘されていた「ミニディズニーランド」のような「ミニ」の比喩的用法が、固有名詞に限らず、「ミニ親善大使」のように社会的地位が高い職業や肩書きなどが後接する例にも確認され、本来のそれには及ばないが、部分的にその特徴や性質などが捉えられ、その人物の様子や振る舞いが類似していることから「ミニ～」と例えられることが分かった。

「プチ」は「活動」部門の下位分類にあたる中項目のうち「生活」「心」「交わり」にあたる要素と結合しやすく、これらの要素と結合する場合、「プチ整形」という例のように、その事柄の本格性や正式さを限定し、「気軽さ・手軽さ・カジュアルさ」といった語感を伴う場合が多い。また、「プチ」には、ある話題や素材、事柄などを自分に近いものとして、引きつけて捉えたり、小ささの程度について主観を前面に押し出して捉える性質があることが分かった。

「リトル」は「主体」部門の下位分類にあたる中項目のうち「動物」や「人物」といった要素と結合しやすい。辞典の語釈にみられる「小さい」「子供の」といった意味のほか、「リトルクラシックバレエ」のように、「子供向けの」「年少者を対象とした」という意味で使われたり、「リトルアジア」という例のように、後ろに地域名や国名を伴い、それらのイメージや特徴などが凝縮されたエリアを規模的に限定しながら示すというような用法があることが分かった。

「マイクロ」は「生産物」部門の下位分類にあたる中項目のうち「機械」にあたる要素と結合しやすい。「マイクロ」は国際単位系で100万分の1を表す単位でもあるので、サイズや規模の面から後接要素をマイクロレベルの小ささに限定したり、「マイクロ手術」のように後接要素の対象が微小な世界のモノや領域であることを表すという2つの主要な用法に加え、「マイクロ会話」のように、ある集合体の構成単位に注目した使い方や、「マイクロマネジメント」のように動作性を伴う名詞を副詞的に修飾するといった副次的な用法も確認された。

以上述べたように、規模や形状の小ささを表す造語成分「ミニ」「プチ」「リトル」「マイクロ」の意味用法とその相違点を多少なりとも明らかにすることができたが、今後の課題として、「プチリトル花見」や「超マイクロミニ大根」のような造語成分を重ねる拡張の用法の分析が必要であると考えられる。